

うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンビラ
第21号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：赤嶺健治 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0156
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



赤嶺 健治
 (うるくの歴史と文化を語る会 代表)

明治期、西暦1900年前後、小禄間切は「琉球絣の本場」や「県下唯一の織物産地」と称され、多くの婦女子が機業に従事し家計を支えていた。「小禄布」（すなわち小禄クンジ）は小禄地域「特有の物産」であり「本県の重要物産」として広く称揚されていたことは周知の事実である。昭和初期（1920年代頃）まで小禄地域で盛んに織られていた小禄クンジが衰微し消滅したことは惜しまれる。今回は、小禄の伝統豊かな「機業の改良進歩」と、その「特産である紺絣の改良」を図る目的で設立された女子実業補習学校の歴史とその変遷を調べてみた。

先ず、上記目的で明治36（1903）年4月、小禄尋常高等小学校内に小禄間切立女子実業補習学校が設立された。教科内容は、機織、染色、裁縫等の実習科と修身、国語、算術、図画の普通科で、生徒定員は100名、修業年限は本科2年、選科1年で、授業料は無料であった。小学校内に20坪の校舎を建築し、機織教室に充て、普通教室および裁縫教室は放課後に同校校舎を借用した。第1期入学生23名中7名が卒業した。2年目の在学生85名中、小禄の生徒は37名で、その他は出身地が那覇、豊見城、真和志、南風原、久米島など広い地域にまたがっていて、他府県出身者も2名いた。翌明治37年4月、同校は、当間村に校舎80坪を新築し移転独立した。

明治38（1905）年9月、小禄間切立女子実業補習学校は、小禄間切立女子工業徒弟学校と改称し、明治41（1908）年4月の町村制施行に伴い、小禄村立女子工芸徒弟学校と改称した。機織科が主体であったため、「当間の布織学校」と呼ばれた。設備は、足踏自動織機8台（内2台手織用、1台綾織用、5台タオル用）、手織八端タオル1台、高機50台、整理器機、下地器機、染色裁縫等の器具を備えて生徒の実習に供し、材料費はすべて学校持ちであった。生徒の出身地は、島尻郡は全村に及び中頭、国頭、宮古八重山の各離島にも及び殆ど全県を網羅していた。

明治41年8月、小禄村立女子工業徒弟学校が糸満町外15箇村組合立となり島尻女子工業徒弟学校と改称した。大正に入り、郡内各村に女子実業補習学校が設立され、機織等の実業教育が引き継がれたため、大正7（1918）年3月、島尻女子工業徒弟学校は廃止され、工業研究所に変わった。通算卒業生数は、本科255名、選科153名、合計408名であった（入学者総数1,063名）。卒業生のうち127名が機織業に従事し、県内における斯業の発展の推進力となった。徒弟学校の本棟の一つは小禄村に譲渡され、同年4月、小禄村立女子実業補習学校が設置された。

大正10（1921）年前後から織物価格の暴落と工場での大量生産（移入織物の増加）に圧迫されて、県内の織物業が衰えを見せ始めた。因みに、大正9年（ピーク年）から昭和2年にかけて、職工が38,859人から10,173人へ、織物製品価額が285万円から188万円に減少した。

平成19（2007）年9月に、小禄クンジの復活をめざして「小禄クンジ研究会」（當間一郎会長）が発足し、諸事業を行っていることは喜ばしいことであり、その成果が期待されている。

（参考文献（略記）：『沖縄縣史』18巻資料編8、『島尻郡誌』、太田『沖縄県政五十年』、神田『沖縄郷土歴史読本』、藤原・金城「明治から大正期の沖縄における女子実業教育について（第1報）」『琉大教育学部紀要』72）

第14回総会を開催す

平成28年6月28日にJAおきなわ小禄支店3階ホールにて総会を開催しました。活動報告、会計報告、活動計画が承認されました。

総会終了後に副代表の上地浩氏による『戦後の生活史』をテーマに記念講演が行われました。



総会の様子



講師：上地浩氏

— 小禄地域の三月遊び（1） —

豊年を呼ぶ歌 — 當間の三月あしひ歌から —



平 良 徹 也
(県立芸大附属研究所 共同研究員)

當間の三月遊びでは、小禄地域の他の字では見ることの出来ないユニークな豊年を呼ぶ歌（稻作関連歌）が當間呑殿内で、その日の午後の宗家（ムートゥヤー）巡行祈願の際に披露されている。この歌は公民館の三月遊びの御座でも例の狂言・稻摺り節と共に婦人会役員や有志の皆さんによって披露されるものではあるものの、巡行祈願の際には當間の御嶽（現）から呑殿内への道すがらと呑殿内での諸願儀礼の後の奉納芸能として演舞され、他の宗家では披露されないところから特別な意義を有していると考えられるものである。本稿ではその呑殿内での儀礼や歌の内容を略記してごく手短に紹介しておきたい。

（事例は2015年の調査による）

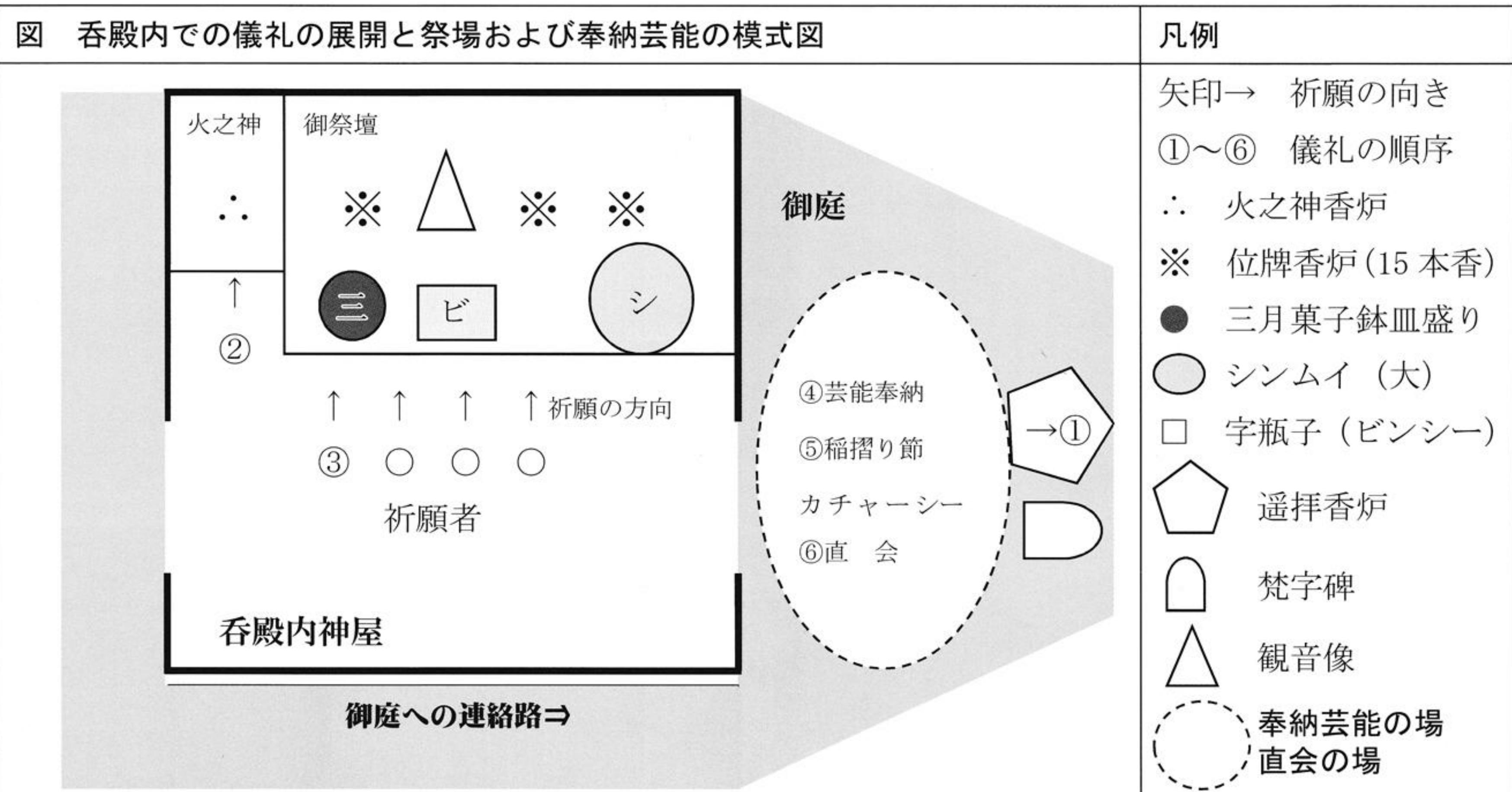
— 呑殿内での儀礼 —

呑殿内では以下の4つの儀礼が場を変えながら婦人会役員や参列の有志の皆さんによって行われる。

- 1 御庭・祈願①、遙拝香炉
- 2 神屋・祈願②③、大シンムイ奉納 （注 大シンムイは午前中に公民館で作られる）
- 3 御庭・芸能奉納④⑤ 大シンムイの御願踊り・稻摺り節奉納・カチャーシー
- 4 御庭・直会⑥ 大シンムイ開きとノロ殿内からの三月菓子受領（全参加者）

その儀礼の意味あいは、1は東に向けての祈願（①）であるところからニライカナイからの神の招請。2は神屋内の祭壇御前にシンムイと呑殿内からの三月菓子鉢盛りを飾っての祈願（②③）となるところから来訪した神への献饌・シンムイを介しての諸願成就の要請。3（④⑤）は来訪神によるムラ人の祝福と諸願成就の約束を交わしたこと意味する神の遊びと神人交歓。4（⑥）が直会・饗宴に当たると考えるものである。ここで強調しておきたいことは呑殿内での祭祀の取りまとめとしての願意の獲得にこれらの奉納芸能が有效地に機能することになると云う事だろう。芸能の意味合いについては次項で触れる。

図 呑殿内での儀礼の展開と祭場および奉納芸能の模式図



（注）御祭壇の神位牌と香炉は次の通り。左より【宗家宮城門中／先祖代々之靈】【觀音像】【大阿務志多礼之靈】【大狩可ガナシ之靈】となって、火之神香炉と觀音像御香炉は白色、他の三器は青色となっている。なお各神位牌は日本様式の黒漆に金文字書きの独立型である。觀音画像は小ぶりの額装品である。)

二 豊年を呼ぶ歌

呑殿内での一連の奉納芸能をここでは豊年を呼ぶ歌として紹介している。

その豊年を呼ぶ歌は次の5曲（當間婦人会提供資料による）で構成されている。その5曲とは、

①呑殿内に登る時の歌 ②稻実見そうれ ③二合どや二合一升二合 ④三月あしひ歌 ⑤稻摺り節
となっているが、各歌の歌意を要約（紙幅の都合で歌詞掲載を省略）して先ず紹介すると、

①呑殿内に登る時…	②稻実見そうれ・	③二合どや二合…	④三月あしひ歌・	⑤稻摺り節
稻が大豊作だよ 頭よ御覧あれ アブシ枕で豊作だ	稻が大豊作なので 蔵に真積みして 酒盛りの大祝宴だ	それ宴の酒集めだ この屋の女主人は気 前が良くて一升二合 も下さった	三月遊びなので 老いも若きも大いに 遊ぼう。それが生き ると云うことなのだ から…	大豊作でアブシ枕 御蔵に真積みだ 稻摺りに精を出せ シチュマも出るぞ 宴もあるぞ…

「①呑殿内に登る時の歌」は今年の前ン田の稻が大豊作で畔枕であるから、「頭よ、ぜひご覧あれ」との訴えが主題である。それを受け「②稻実見そうれ」では、酒を酌み交わしてぜひその大豊作を祝うべしとの主題が浮かび上がって来る。「③二合どや二合 - 一升二合」では、そのために各家々からマツリ用のお酒を一合ないし二合ずつは徴収しようとの主題が示され、「⑤稻摺り節」はこれらを受けて、今年の稻の大豊作をムラ人の全員で確認し合うために、頭の家の庭先で稻摺りをし上げ、これから持たれるであろう祝宴へと人々をいざなう様を狂言として表現したものであろうと云う事になる。つまり今年の稻の大豊作をこの場合は呑殿内で予祝したものだろうと云うことだ。この時期は稻の農事暦から見てゆくと稻の成長期に当たり、苗から成長した稻が根を張り、茎を太らせ、青葉をいよいよ充実させて行く時期に当たっている。かつて農業を主体に生計を立てていたこの時期は、麦がそろそろ熟れ初め、しかし刈り入れまでにはまだ暫くの間があった時期であったほか、キビ作農家にとってはほぼ刈り入れが一段落した隙間の時期になっていた。つまり農家にとってのほっと一息入れる程の僅かな時間が見いたせた時期であったということが、官許の遊びが持たれた理由のひとつとして見えて來るのである。

そのことを「④三月あしひ歌」は表現している。この歌の冒頭句「三月がなりば心浮かさりてい玉水に下りていかしら洗わ」は他地区でもよく見かけるもので、三月遊び歌の定番の冒頭句となっている。また、それに続く「遊び欲さあていん一隙に遊ばりみ・・」「白髪お年寄りや床ぬ前に飾てい・・」「泊高橋に銀簪落ち・・」なども當間独特のものではなく、かつて三月遊びを行っていた地域でほぼ共通した歌詞によつて構成されている。その点にやはり注意を向けるべきもので、詰まる所、共通した神遊びだったと考えるべきものであろう。他地域ではほとんど失われてしまった豊年を呼ぶ歌の伝承が當間に残されていたことを通じて、小禄地域や他地域の三月遊びもかつては農耕祭祀の一端を担っていたのではないかとの再検証を迫っているように思うのである。

.....【参考 當間の三月遊び（2015年4月22日）当時は以下のような内容で実施されました】.....

準 備 午前の部1（8時頃～10時頃）シンムイ5盛作り（特大1盛：御座飾り用 大1盛：呑殿内お供え用 小3盛：三宗家お供え用）

神事 巡拝1 午前の部2（11時頃～正午）祈願とシンムイの奉納

①沢嶋門中宗家（喜屋武姓）：神香炉 ②根屋（ニーヤ、瀬底門中宗家神屋）：火之神・根屋神香炉

神事 巡拝2 午後の部1（2時頃～3時頃）祈願とシンムイ奉納および道ジュネー

①国元：上堀川（ウィーフッチャ・金城姓）：親父祖香炉

②当間之御嶽：川神・地頭火の神、祈願終了後殿内へ向けて道ジュネー（チヂンと歌謡）

③當間呑殿内：御庭で東方遙拝、火之神・神香炉（神屋）、芸能奉納とシンムイ直会（御庭）／※本稿で概略を紹介

⑤公民館へ向けて道ジュネー（チヂンと歌謡で練り歩く）、④公民館前：出迎えとカチャーシー競演

直会・饗宴 午後の部2（3時頃～5時30分頃）公民館御座での遊び

.....

赤嶺勢理客の婚姻譚



幹事 長嶺 弘善
(大学非常勤講師)

が、宮平ノロ担ぎ出しを勧めた(拙稿『ガジャンビラ19号・20号』)。そして、ある年の五月ウマチーの日、宮平御嶽での拝みを終えたノロの元に、赤嶺勢理客が現れ、求婚する。

「私は豊見城間切赤嶺村から来た、仲本家の赤嶺という者です。ノロは聞きしに勝る美しさだ。是非とも〔ちゃーしん〕、私の妻に〔わんとうじ〕なって欲しい〔なていとうらし〕。」

宮平ノロは、一見して大親の剛力ぶりを見抜き、また凜とした立ち居振る舞いに心を動かされた。だが、内心の動揺を見せまいと手合わせを求めた。しかし、いかに「力が強い」ノロでも、幾多の武勇伝を持つ大親にはかなわない。ティージュクンガーを掘ったと評判の偉丈夫である大親は、軽くそして柔らかくノロの手合わせを受け流し、ひょいと肩に担ぎ上げた。そのときノロは、大親の強さと優しさを感じ、妻となることに得心した。「大親こそ私の夫になって欲しい」と思ったのである。そして赤嶺村に戻った二人は夫婦となった。

由来記には、お祭り〔ウマチー〕のとき、大親が「御嶽に出てる祝〔女〕を担いで帰宅」し、妻にしたとある。宮平御嶽における求婚・手合わせの場面は、筆者が物語風に脚色した。19世紀琉球空手の拳聖と称された松村宗棍は、若い頃、「女武士」ウメと「掛け試し」をした。一度目はウメの左正拳突きを顔面に受け、倒された。二度目に勝った後、二人は結婚したという(野原耕栄『沖縄伝統空手「手」(Tiy)の変容』280頁、球陽出版2007年11月)。勢理客大親と宮平ノロとの手合わせは、大親が一枚上手であった。

山口門中には、『山口門中之世系図』(1983年11月)がある。今帰仁城主の流れをくむ宮平大主を元祖とし、その長男・鄧氏小橋川親雲上を1世と数え、2世・兼城筑登之親雲上、3世・糸満親雲上、4世・山口親雲上と続く、「士〔さむれー〕」の家系という。首里王府の印章が押された系図があったが、戦争で失われた。『世系図』によると、『球陽』に事績が記されている糸満親雲上が、山口門中の3世その人であるという。糸満親雲上は、1633年(尚豊13年)に、「糸満地頭職に任じて、宮平邑に住居」していた(『球陽』[292])。1639年の旱魃では、耕作奉行として普天間「後河」から北谷まで々々に「井」を築いて農田に水を引き([299])、また同年、大将として山北国頭郡の当謝という盜賊を「奇謀」と「良計」で捕らえる功績をあげた([300])。

そして山口門中は、現当主赤嶺良英氏(1930年生)が18世であり、およそ1代25年で家系が承継されている(『世系図』序、筆者計算で1代22年)。3世・糸満親雲上が活躍した1630年代から逆算すると、1世・小橋川親雲上は1580年代に壮年期を迎えていたと推測できる。赤嶺勢理客(1560年頃生)が青年期を迎える頃とほぼ同時期である。また『世系図』では、1世・小橋川親雲上の妹に「真牛金」という宮平村のノロの「始祖」が記されている。この「真牛金」が大親と婚姻した宮平ノロかどうかは不明である。赤嶺氏によると、王朝時代に小禄に嫁いだ女先祖がいたという伝承がある(2014年9月26日談)。それは、①相手に赤嶺姓を与えたとか、②元々相手も赤嶺姓で奇遇であった、というものである。今では伝承もあやふやになりつつある。ただ、大親が宮平ノロを力まかせに略奪したのであれば、山口門中元祖の宮平大主(ノロの父)と敵対的・険悪な関係となっていただろう。それどころか、「士」身分の宮平大主や小橋川親雲上に、「百姓」勢理客大親は制裁されていたかも知れない。なお、「士」身分は1609年薩摩侵攻前後頃から漸次形成され、1689年系図座設置、1732年「位階定」制定により、確立する(田名真之「身分制一士と農一」『新琉球史一近世編(下)』所収39頁以下)。したがって、赤嶺勢理客の青壮年期である16世紀末頃は、王府が「士・農」身分形成へと踏み出す時期である。

赤嶺勢理客と宮平ノロは惹かれ合う
ノロは芭蕉衣で御願を行う(『シマの民俗』154頁)。(作画:琉大みどり、構成 © :ZEN)



仲本門中の五月ウマチー行事は、南風原町宮平の赤嶺家（山口門中）参拝から始まる。そして赤嶺家も、仲本門中の来訪を客人として受け入れている。400年以上前の大親とノロとの婚姻譚が、今に受け継がれているのである。決して略奪婚などではなく、両家公認の、慈愛に満ちた婚姻であったと推測できる。

この大親の妻・宮平ノロの怪力ぶりについて、別の伝承が門中由来記に記されている。

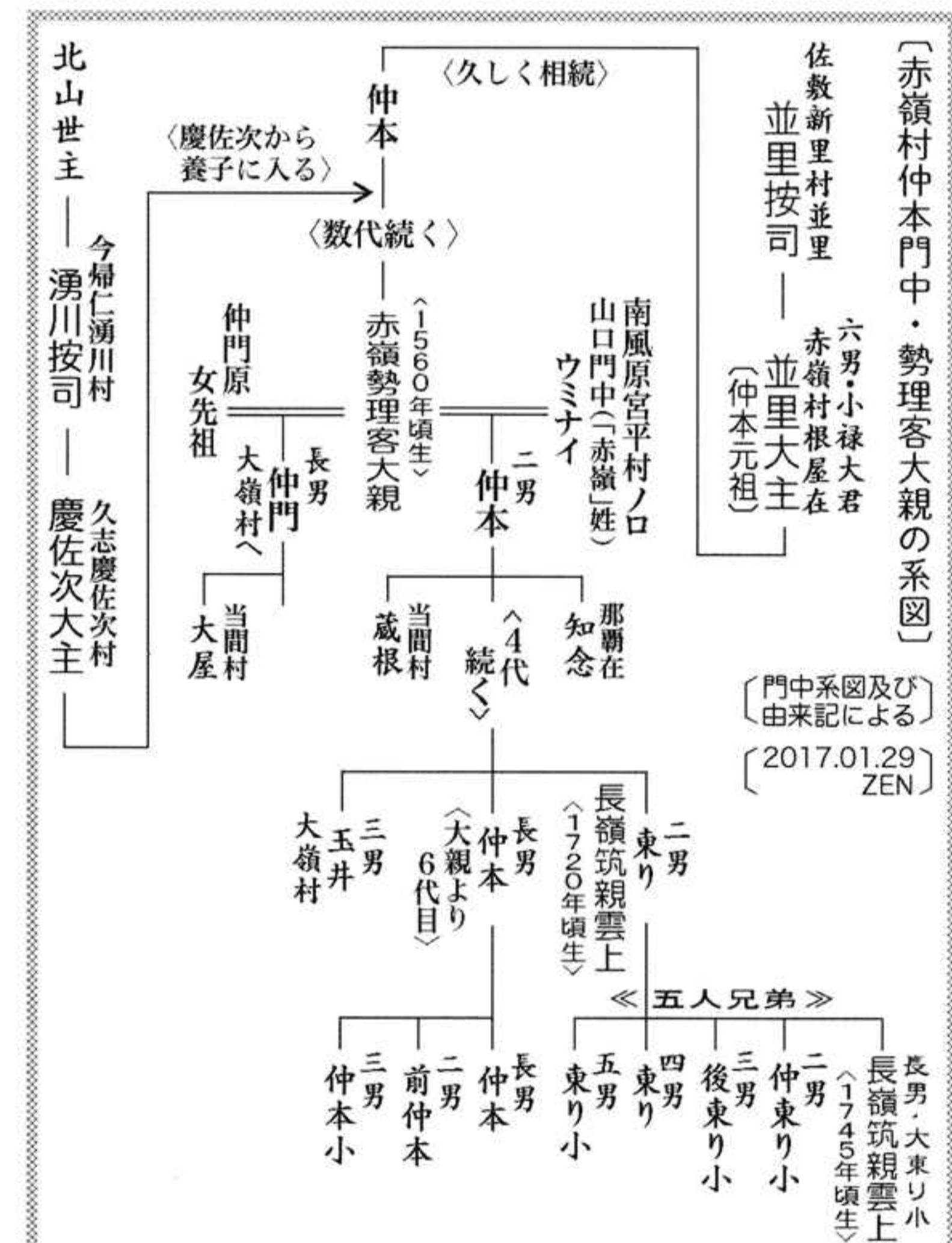
島尻のある村の剛力トモシムムクラーという者が、大親との力試しに、馬に乗って赤嶺村にやってきた。ムムクラーが仲本家の前で大親を待っていると、大親の妻が、大きな石製の煙草盆（或いは火鉢）に火種を入れて持つて現れた。ムムクラーは大変驚き、妻でもこんなに力があるなら夫の力は計り知れないと、急いで馬に乗り帰路についたという。その後、煙草盆は二つに割れ、仲本家（後継途絶）に保管された一つは行方不明となつた。もう一つは「東り」家（大親から6代後に仲本家から分家、『ガジャンビラ14号』）に保管され、由来記作成時（1954年）まで残っていた（現在不明）。それは重量が「百參拾斤位」、つまり78キログラム程あったという。すると、妻は約150キログラムの石（煙草盆）を持ち上げたことになる。現代女子重量挙げ最重量級の日本記録を優に超える。ノロが持った煙草盆が大きな軽石の類いであったか、約350年間戦後まで伝承される間に、残された煙草盆の片割れに何らかの取り違えが起こったと考えられる。しかし、煙草盆の重さが重要なのではない。大親との力試しに来た剛力のムムクラーが、大親の妻の力強さを確認することで、夫たる大親の剛力を推し量った。そして自身の剛力では、とても太刀打ちできる相手ではないと観念し、戦わずして退散したのである。

ところで、大嶺村仲門門中と赤嶺村仲本門中とは、兄弟門中である（**〈仲本門中系図〉『ガジャンビラ14号』**）。両門中は、7年毎の今帰仁上りでは、勢理客大親の数代前の先祖である慶佐次大主ゆかりの地を廻る。出自元である東村慶佐次・新里家や、慶佐次川入り江の門中墓を参拝している（『大嶺仲門一門 今帰仁上い東御廻い』1999年11月）。由来記によると、仲本は並里大主から久しく相続してきたが、いつの時代か「世子」つまり継承者がなく、慶佐次大主が養子に入った。そして数代後の1560年頃に勢理客大親が誕生する。大親は筆者からは14代前の先祖で、年代を辿るのは大親までである。

〈系図〉によれば、大親（仲本家）の長男は「大嶺仲門原元祖」であり、二男が仲本家の継承者である。つまり、大親には、二男を産んだ宮平ノロ（仲本門中御神屋で「ウミナイ」として祀る）の前に、長男を産んだ女性（妻か）がいたことになる。そして仲門門中墓には「女先祖」と刻まれた石碑がある。ここからは、筆者の推測である。仲門門中は、大親と先妻「女先祖」との間に生まれた長男を元祖とする子孫一族で、仲本家（仲本門中）から分家独立した。そして仲本家は、大親と後妻ウミナイとの間に生まれた二男が継承した。先妻は大嶺村の出身だが早くに亡くなり、長男は母（先妻）方の実家で成長したのである。長男と子孫は大嶺村の広い土地を開拓し繁栄した。大親と後妻ウミナイも、長男にそれなりの援助をしたであろう。というのは、旧正月初拝みや旧盆お迎え[ウムケー]には、現在でも互いに御神屋を参拝し、また神御清明には互いの門中墓を参拝している。先妻・長男の方の子孫と、後妻・二男の方の子孫との関係が不仲なら、400年以上にわたる現在の関係はなかったと思われる。これは、大親とウミナイとが、長男・二男を分け隔てなく、慈愛をもって成長を見守り続けたからであろう。大親は、子孫に自分と同じ剛力の者がいれば自分と同じ墓に埋葬し、そうでなければウミナイと一緒に門中墓に埋葬するようにと、遺言した（『ガジャンビラ19号』）。赤嶺村外れの門中墓への最初の被葬者がウミナイである。大親は鏡水崎原の御墓に葬られた。

赤嶺勢理客は武の人（強者・勇者）であり、知の人（知者）であり、同時に、人を思いやり慈しむ心をもった仁の人（仁者）であった。孟子（[梁惠王上]）に、「仁者は敵なし」とある。仁者は深い愛をもって人と交わるから敵というものがない（『広辞苑第六版』）。赤嶺勢理客の生き様は、武を驕らず、知をひけらかさず、慈しみを持って人の道を示すものであった。大親を先祖と仰ぐ仲本門中構成員の人生の師であり、延いては赤嶺自治会員にとって人生の道標となることを願う。

—— 2017年2月16日・旧二十日正月稿



※勢理客大親の生年推測（『ガジャンビラ15号』8頁）

1720年頃生の初代長嶺筑親雲上から6代前の大親生年を逆算。
1世代を①27年承継で1558年生、②25年承継で1570年生となり、
大親は「1560年頃生」と推測した。『19号』9頁「1555年頃」は誤り。

火葬と洗骨ならびに調査協力依頼



津波一秋
(筑波大学大学院博士課程)

1. はじめに

この度、「おろくの歴史と文化を語る会」（以下、「語る会」）発行の会報『ガジャンビラ』に原稿を依頼された。会長以下、一部の会員の方にはすでにご了解頂いているのであるが、まずは自己紹介も兼ねて原稿執筆を引き受けるに至った経緯や私の研究等について、簡単に触れておきたい。50代が「若手」とされる「語る会」において、なぜ20代の私がそこに参加し、さらに『ガジャンビラ』に原稿まで寄せることになったのか。読者を含め、不思議に思う関係者も少なからずいらっしゃると思われる。そこで以下、これらの点から話を起こしてみたい。

2. 自己紹介

筆者は現在、筑波大学大学院博士課程の学生として、文化人類学・民俗学の立場から郷土である沖縄の研究を行っている。人類学・民俗学においては比較的長期間のフィールドワーク（現地調査）が必要となるのだが、その調査地として小禄地区を調査することになった。そこで、昨年の10月末から約1年間の予定で、ここ小禄地区の宇栄原で生活しながら調査を行っている。「語る会」に参加するきっかけはまずこの点にあるのだが、小禄地区をフィールドとして選んだ背景には次のようなことがある。

筆者の関心は人類学・民俗学的な沖縄研究の中でも、特に今次大戦以後、軍用地として土地を接収され、強制移動を経験した人々や集落に関するものである。人類学・民俗学の中で沖縄は他の国内地域に比しても相当の研究蓄積を有するが、このような「接収集落」や「強制移動」という対象や事象については実は近年まで看過されてきたきらいがあるのである。このような問題関心から調査地を選定したとき、自身のフィールドとして小禄地区が浮かび上がって来たわけである。小禄地区においても戦前の旧海軍飛行場建設に始まり、戦後も繰り返し軍用地接収が行われたことについては、『ガジャンビラ』読者はよくご存知であろう。またそれが、集落の移動や新部落・新町の建設、また御嶽や墓の移動といった形で、この地域に大きな影響を与えてきたことについても然りである。

このような、接収と移動という歴史的事実を踏まえ、またそれによる変化や影響を常に考慮に入れながら、現在における「うるく」という地域の姿を人類学的・民俗学的な観点から明らかにしていきたいのである。無論、現在はまだ調査の段階であり、課題も山積しているため、何も結論めいたことは言えないのではあるが、とにかく、このような大学院生が現在、小禄地区を調査しにやって来ているという点はご理解頂きたいのである。調査中は小禄南図書館はもとより、各自治会館や門中の御神屋、さらには門中墓など様々な場所に現れると思う。もし見かけた際は（決して怪しい者ではないので）、小禄について色々とご教示頂ければ幸いである。

3. 火葬と洗骨

以上のようにして現地調査のため小禄へと来たわけであるが、この調査を行うなかで「語る会」の活動にもお誘い頂いた。そして、先日のある集まりにおいて、この原稿の執筆も依頼されたわけである。実は依頼があった際、ありがたいことにそれを「調査依頼として書くことも可」という条件が出された。そこで、今回、お言葉に甘えてこの場を借りて調査依頼を行いたいと思う。それは、「洗骨の様子を見せてもらいたい」というものである。

周知のように洗骨とは、奄美・沖縄の葬法において第一次葬の後、一定期間をおいて遺骨を水や酒などで洗い清める儀礼である。そして、現在でも小禄地区ではいわゆる「墓の番」が終わった骨に対して洗骨が行われている¹。読者の中にも、実際に洗骨の様子を目にした方もいらっしゃるであろう。小禄地区の人々にとって洗骨を行うことは、もしかしたらごく当たり前のことなのかもしれない。しかし、この小禄における洗骨については、実はきわめて興味深い点があるのである。

まず、試しに渡辺他編『沖縄民俗辞典』（吉川弘文堂、2008年）における「洗骨」の項目をみてみよう。それによると、「沖縄では1960年代に火葬が普及し、今では洗骨はごく一部の離島で行われているにすぎない」[296頁、傍点筆者]という。このように、現在、洗骨については沖縄本島はもちろん、離島でもほとんど行われていないと考えられているのである。ところが、実際はどうであろうか。読者もすでにお気づきのように、火葬が普及してすでに久しい沖縄本島において、しかも最も都市化の進むこの県都那覇市において、現在でも洗骨は続けられているのである。なぜ、火葬に移行してもなお、洗骨が小禄地区では続けられているのか。人類学・民俗学を学ぶものとして、このように問わずにはいられない。あるいは問わねばならないだろう。筆者は小禄の民俗を前にして、きわめて興味深い課題を突きつけられたわけである。

確かに、火葬への移行に伴って、洗骨が消失するを考えるのはある意味では自然なことである。そもそも、沖縄において洗骨というのは、風葬と深く結びついたものであると考えられてきたからである。風葬においては遺

体を土に埋めることもなく、また火葬場で処理するわけでもなく、自然のままに晒しておく。そして、しばらく遺体を自然に腐ちさせたのち、骨を洗い清めるわけである。このように考えると、洗骨とは「肉の腐った後の骨を洗い清める」という、風葬における遺体処理の一プロセスとして行っていたわけである。しかし、火葬が普及すると、このプロセスは必要なくなる。例えば、喜如嘉のある事例²によれば、火葬によって処理された遺体の骨は、その白さからすでに洗骨をしたのと同様の解釈がされたという。そして以後、火葬後は洗骨を行わなくてもよいということになったようである。ちなみに、この喜如嘉の場合、火葬を導入した背景には、風葬時の洗骨に伴う女性の負担を軽減するという意味合いもあったようである。いわば、洗骨をしなくても済むように、火葬が導入されたのであり、洗骨と風葬はそれだけ分かれ難く捉えられていたわけである。このような意味において、洗骨と風葬はセットで考えられるのであり、従って、風葬の消滅とともに洗骨もなくなると一応は考えられるわけである。

ではなぜ、小禄地区においては風葬から火葬に変わっても洗骨が続けられているのか。筆者は現段階で何も結論は持ち合わせていない。しかし、少なくとも「骨を洗い清める」という行為が何を意味するのかを、さらに突き詰める必要はあるだろう。例えば、与論島では洗骨前と以後で頭蓋骨の呼び方が「チブル」から「ハシャー」に変わるという³。ハシャーの正確な意味は明らかでないが、少なくともチブルよりも敬意のこもった言葉であるという。この与論の報告においては、洗骨後にチブルからハシャーへと変わることで、単なる死者が祖先へと昇華されると考えられている。もっとも、「所変われば品変わる」であり、喜如嘉や与論での事例から得られた解釈が、小禄でもそのまま妥当するとは限らない。それは現地調査によって裏付けられねばならない。洗骨の儀礼的意味とは何か。小禄において、それを確かめてみたいのである。

また、小禄での洗骨は単に葬制の問題としてではなく、墓制との関連で考える必要もあるのかもしれない。葬制と墓制を併せて葬墓制ともいうが、まさしくこのような視点から火葬における洗骨を考える必要もあるのではなかろうか。葬制とは「風葬」や「火葬」といった人の葬り方、あるいは遺体処理の仕方に関わる問題である。一方、墓制とは、「門中墓」や「墓の番」といった、墓やその使い方に関する問題である。火葬に移行すれば洗骨も無くなると考えるのは、洗骨を単に葬制上の問題としてのみ捉えているからである。例えば、これまで述べたように、洗骨とは「骨を洗い清める」という遺体処理の段階と考えるやり方である。無論、それは間違いではない。事実、火葬の普及後は洗骨は多くの地域でみられなくなっている。しかし、小禄で洗骨が未だに行われているということは、この考え方だけでは洗骨という儀礼の全てを明らかにはしていないことでもある。小禄では葬制における洗骨とともに、墓制においては門中墓や「墓の番」といったものが筆者の印象としては特徴的である。小禄の火葬と洗骨の問題を考える際、さしあたりの見通し、あるいは糸口として、このような門中墓や「墓の番」にも注意を向けながら調査をしていきたいと考えている。

なぜ、火葬になってからも洗骨が続けられているのか。小禄について「語る」ことは、まだまだあるというわけある。

4. 調査協力依頼

前節の冒頭にも述べたが、ここで改めて調査協力をていきたい。筆者が小禄で現地調査を始めて以降、実際に洗骨を見たのは赤嶺での一例のみである。だが、上記の火葬と洗骨の問題を考える上では、まだまだ事例収集が必要である。そのため、もし洗骨を行う際は筆者にも是非、その様子を見せて頂きたい。その際は、墓を開けてから洗骨を行い、そしてまた次の「墓の番」へと交代して墓を閉じるまでの一連の過程を見せていただきたいと考えている。また、その様子は写真として記録にも残したいと考えているが、無論、遺族への配慮も最大限行うつもりである。例えば、合掌中は前からではなく、その横か後ろから撮影するといった具合である。

人がいつ死くなるかわからない以上、「墓の番」の交代に伴う洗骨もいつ見ることができるかわからない。この点、洗骨の調査に関しては、決まった時期に行われる自治会や門中の年中行事とは異なる難しさがある。また、全く見ず知らずのものが、急にそのような場にいて調査をするのも、どこかはばかられる面があるのも確かである。やはり、何らかの紹介から、当事者に承認を得た上でないと、この調査は難しいのである。筆者にとって様々な調査項目がある中で、洗骨という問題について、調査依頼を出す理由もここにある。また、先に述べた軍用地接収というテーマとも、さしあたり間接的なつながりしか見いだせない洗骨という問題を、あえて取り上げた理由も、この問題の重要性と難しさを考慮しての判断である。

もし、洗骨の様子を見せても良いという方がいらっしゃれば、是非、筆者か「語る会」までご連絡をいただきたい。筆者の連絡先は、メールであればtsuha09@yahoo.co.jp、電話であれば090-7587-9304である。「語る会」の連絡先については当会報の冒頭を参照されたい。

¹ もっとも、小禄地区では「洗骨」というよりは「チュラクナイン（きれいになる）」と表現する。洗骨に相当する儀礼については、奄美・沖縄の各地で様々な表現が用いられる。民俗語彙は各地にそれぞれ存在するわけである。しかし、説明用語としては統一的な用語が必要なのであり、その際に用いられるのが洗骨というわけである。本稿でも以下、洗骨という語で統一する。

² 尾崎彩子「洗骨から火葬への移行に見られる生死観－沖縄県国頭群大宜味村字喜如嘉の事例より－」（日本民俗学会『日本民俗学 第207号』、1996年5月、58-83頁）

³ 津波高志「仲松説における葬法と神」（沖縄民俗学会『沖縄民俗研究』第28号、2010年、25-29頁）

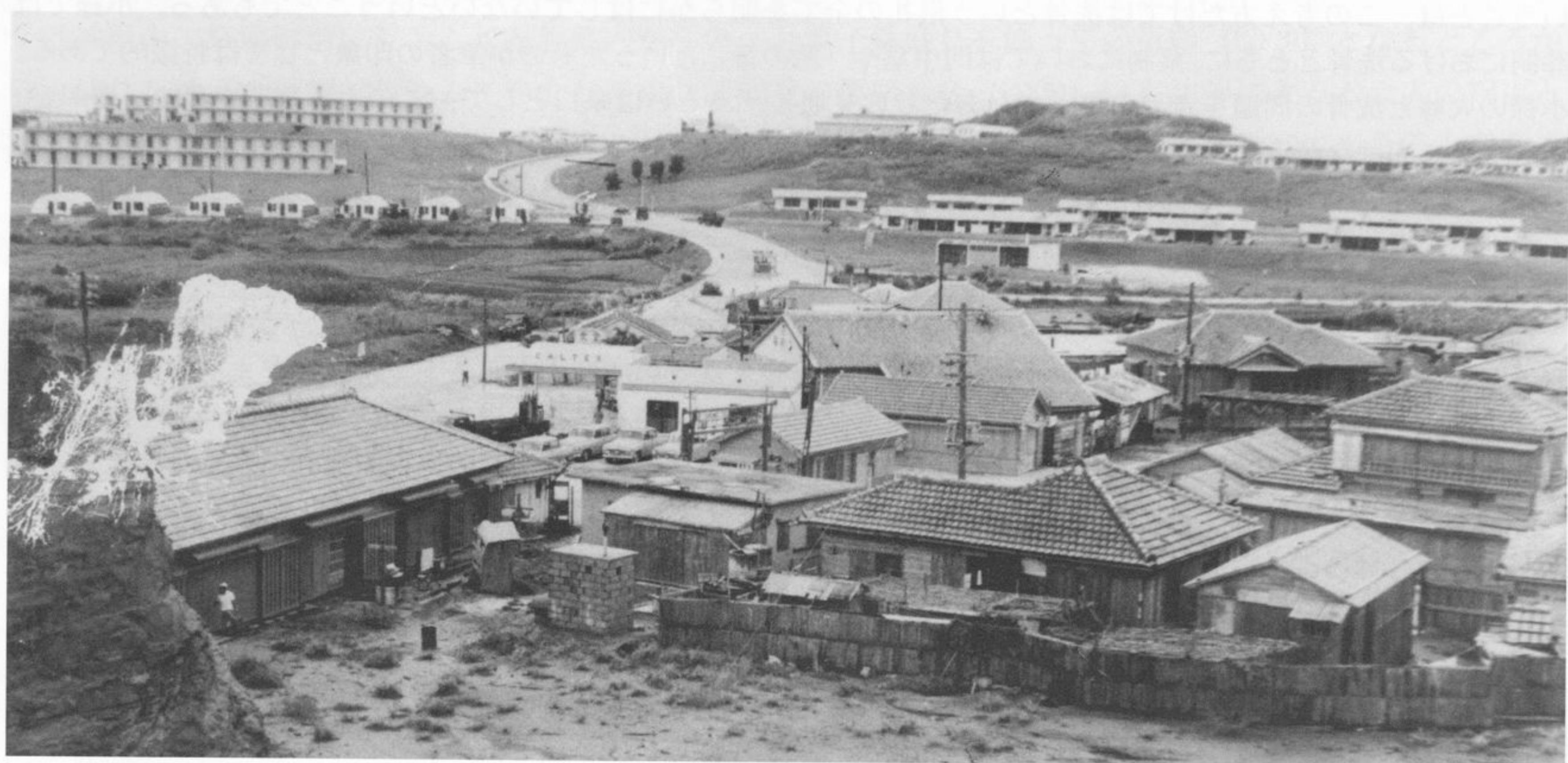
《うるくの貌》^{かお}



『軍作業への道 第二ゲート』

時代：1960年代 提供者：長嶺 操氏（赤嶺）

戦後、旧居住地を接收（1953年4月米軍布令109号「土地収用令」）された住民は生活の糧を得るために、軍作業へ第二ゲートを通過していく。（現：マンガ倉庫付近）



『第二ゲート遠景』

時代：1960年代 提供者：高良弘幸氏（大嶺）

写真中央が第二ゲート、北上道路（写真上方）は現在の国道331号モノレール路線。西側（写真左方）にはコンクリート兵舎（現存）とカマボコ兵舎。東側（写真右方）の小高い丘はカンジバラ（ガッコー毛）と米軍住宅、そこには小禄尋常高等小学校（昭和16年4月に戦時体制下「小禄第一国民学校」と校名変更。一般には「当間学校」と呼ばれた。）があったが、戦火で焼失した。返還後は区画整理（1984年施工）により県営赤嶺団地、住宅・マンション、小売店、モノレール赤嶺駅と次々と建設され賑わいをみせている。

写真下方の道路は県道231号（1989年小禄バイパス開通により、国道331号より変更）。ゲート周辺には、米兵相手の質屋（Pawn Shop）、新〈辻〉町社交街（1951年11月）が出来た。

CALTEX（給油所）、マルロク製パン工場が写っている。